

## 衛生指導課 NEWS

### 農場の衛生管理にHACCP方式を導入しましょう。

はじめに

新しい衛生手法であるHACCP方式を畜産農家へ導入することを目的として、平成12年度からHACCP導入普及定着化事業を開始しました。事業のなかで実施した調査成績及び本方式導入への注意点等をお知らせします。

#### 1. 危害因子の調査

各畜種の危害因子(人に危害を及ぼす恐れのあるもの)として次のものが考えられています。

各畜種の危害因子

乳用牛	抗菌性物質の残留 サルモネラ、O157*
肉用牛	抗菌性物質及び注射針の残留 サルモネラ、O157*
豚	抗菌性物質及び注射針の残留 サルモネラ
採卵鶏	抗菌性物質の残留 サルモネラ

これらのうち、抗菌性物質及び注射針の残留といった危害は発生時期や発生場所が、ある程度、明確になっていますが、サルモネラやO157の農場における汚染実態は、明らかになっていません。このため、事業のなかでこれらの危害因子の調査(細菌検査)を行いました。

#### 2. 細菌検査成績

##### (1) 乳用牛

菌種	検体数	陽性数	陽性率(%)
サルモネラ	416	0	0
O157	416	2	0.5

##### (2) 肉用牛

菌種	検体数	陽性数	陽性率(%)
サルモネラ	448	0	0
O157	448	6	1.3

##### (3) 豚

菌種	検体数	陽性数	陽性率(%)
サルモネラ	269	14	5.2

##### (4) 採卵鶏

菌種	検体数	陽性数	陽性率(%)
サルモネラ	133	11	8.3

以上の成績のとおり、各畜種とも危害因子と考えられる細菌が低い割合ですが検出されていることから、次のことに注意してください。

#### 3. 農場における対策

##### (1) 日常の管理では

- 家畜の体表、畜舎、餌槽及び水槽を清潔にし、定期的な消毒を行いましょ。
- 農家自身も手洗いを中心とした衛生処置を励行しましょ。
- 関係者以外の立ち入りを制限し、農家以外の一般の人が家畜等に接触しないようにしましょ。
- ふん尿は堆肥化等適切な処理を行いましょ。堆肥化による熱でこれらの菌は死滅します。

##### (2) 出荷時には

- 体表にふん便が付着した家畜は、と畜場へ出荷する前にこれを落としてから出荷しましょ。また、解体時の汚染を防止するため、出荷前の餌切りを行ってくださ。

以上のようなことは一般衛生管理プログラムとして、HACCP導入の基本となります。

#### 4. 動物用医薬品の適正使用が重要です。

危害因子には食中毒菌だけでなく、抗菌性物質の残留も考えられています。これらの適正使用にあたっては、獣医師の専門的な知識・指導が不可欠です。かかりつけの獣医師を決め、その指導のもとで使用しましょ。

#### 5. 記録することが大切です。

HACCPは別名、記録システムと呼ばれています。日頃の衛生管理や動物用医薬品の使用を記録することにより、忘れず、正確に衛生管理等が実施できるとともに、その証明にもなります。

#### 6. 最後に

現在、畜産物は農場から出荷された後の加工、処理及び流通段階では、すでに本方式の導入・整備が進んでいます。今後、生産現場である畜産農場へも導入が求められることは確実です。

このため次のような、まず実施可能なことから始めましょ。

- 一般衛生管理を確実に行いましょ。
- かかりつけ獣医師(管理獣医師)を専任しましょ。
- 衛生記録簿を作成し、それを保存しましょ。

#### 新潟県農林水産部畜産課

担当：家畜衛生係

TEL 025-280-5308

FAX 025-280-5010

# 生産農場における危害因子 モニタリング調査成績について

畜産物の安全、安心かつ高品質な食品に対する消費者の志向が高まる中で、生産段階から安全性確保対策を強化することが、畜産の振興を図る上で極めて重要であることから、当協会では平成12年度から新しい衛生管理方式である HACCP 方式に基づき、衛生管理ガイドライン普及事業のうち危害因子対策支援事業の中で各畜種毎にモデル農家15戸（肉用牛5戸、養豚6戸、養鶏4戸）を選定し農場衛生管理状況調査（危害因子モニタリング調査）及び危害因子（サルモネラ菌及び腸管出血性大腸菌O-157）の調査、検査を実施したので報告します。

## 1. 農場衛生管理状況調査

調査方法は、聞き取り調査で生産現場における重要管理点として、(1) 外部からの危害持ち込みについて4項目 (2) 農場内部の危害因子 19項目の計23項目について、その管理状況を3回にわたり評点評価（4ランク方式3～0点）69点満点とした。

表1に示すとおり、若干なりとも巡廻指導の効果がみられますが、各畜種とも低いスコアであった。特に、設備関係、設備運用関係、洗浄・消毒関係等の基本項目で低いスコアであったが、各畜種とも疾病対策、医薬品投与、家畜の管理のチェックスコアは概ね適正に実施されている評点でした。

## 2. 危害因子の検査結果

危害因子として想定される、腸管出血性大腸菌O157、5検体、サルモネラ菌15検体を検査し表2に示した。いずれの畜種からも検出されず陰性でした。

## 3. まとめ

今回の調査、検査から考察しますと、危害因子検査では各畜種とも危害因子（腸管出血大腸菌O157、サルモネラ菌）は検出されずに良好でした。

農場衛生管理状況調査から、重要管理点(CCP)面の評価が指摘ポイントとなっていますので、肉用牛及び養豚では、日常の畜舎内の定期的な除糞・清掃、消毒や施設整備による堆肥化処理が重要であり、消毒槽の設置と消毒剤の定期的交換、手指の洗浄、衛生害虫（ハエ）対策も重要です。採卵鶏では、農場衛生状況調査で養豚同様、肉用牛より良いスコアであり、また、危害因子(サルモネラ菌)の分離も陰性

でした。しかし、重要管理点である、除糞・清掃、消毒にさらなる努力と危害因子に係る重要管理点の、導入雉、飼料・飲用水の汚染防止対策と、ストレス、鶏舎の汚染、ネズミ・害虫による汚染等拡大対策及び鶏卵の交差汚染防止対策が必要であります。

表1 農場衛生管理状況調査

選定農家	調査対象畜種	調査結果(点数の計)			備考
		第1回	第2回	第3回	
5	肉用牛	107 (21.4)	114 (22.8)	114 (22.8)	23項目×3点(最高)戸数=69点
6	養豚	207 (34.5)	219 (36.5)	222 (37.0)	23項目×3点(最高)戸数=69点
4	採卵鶏	124 (31.0)	129 (32.3)	129 (32.3)	23項目×3点(最高)戸数=69点

表2 危害因子の検査結果

選定農家	対象畜種	検査材料	検査項目	検査結果			備考
				検体数	陽性	陰性	
5	肉用牛	直腸便、糞便、飲料	直腸出血性大腸菌O157	5	—	5	
			サルモネラ菌	5	—	5	
6	養豚	糞便、飲料、豚房塵埃	サルモネラ菌	5	—	5	
			サルモネラ菌	1	—	1	
4	採卵鶏	盲腸便、糞便、飲料	サルモネラ菌	3	—	3	
			サルモネラ菌	1	—	1	

# トピックス

## ～防寒対策について～

猛暑の夏から、涼風と共に秋の便りが聞こえてきます。気温も低下するため注意しましょう。特に10月上旬から一気に夜温が低下するため、寒さに弱い子牛や豚は気温の確保を優先させ防寒に努めましょう。

### 1. 畜舎内気温を保つ

- (1) 畜舎の隔壁の隙間をふさぎ隙間風を防ぐ
- (2) カーテンを二重としたり、断熱材を利用する。
- (3) 還気利用ダクトやヒートチェンジャー等を利用し、有害ガスの排出による舎内気温の低下を防ぐ

### 2. 家畜の体温を保つ

- (1) ガスブルーダーや電熱及び保温箱等の補助熱源を利用し、ステージ別に必要な気温を確保する。
- (2) 子畜の場合、床からの熱の逃げ出しを防ぐために敷材をたっぷり敷き、毎夕にチェックし、濡れていたら乾いたものと取り替える。

### 3. 飲水の水温を保つ

- (1) 凍結防止のために配管に断熱材をまく。
- (2) 子畜の場合、飲水の水温が低いと摂取量が減少するため、お湯を飲水桶に足し、水温を上げてやる。

### 4. 飼料の増給等を行なう

- (1) 豚の場合は、配合飼料を2割程度増給する。
- (2) 育成牛の場合、ルーメン発酵により熱が出る粗飼料を不断給餌する。